

地域開発に伴う坂出市の変貌

矢野 由美子

瀬戸大橋の開通がいよいよ3ヶ月後に迫った現在、香川県坂出市は、めまぐるしい変貌を遂げている。坂出市は古くから塩の町、またそれを積み出す港町として、地域性を生かしながら、小さいながらも安定した町として発展してきたのである。

ところが、戦後、塩業の斜陽化とともに、高度成長期に番の州工業開発が行われたことによって坂出市は四国第一の工業都市へと成長した。番の州埋立て地への大企業生産工場の立地は、雇用機会の増大、地域経済の発展等、坂出市に様々な恩恵をもたらした。また、そこで働く労働者やその家族が流入し、坂出市の人口は、昭和40年から50年の10年間に6,340人、市全体の約1割にあたる人口が増加した。また、郊外には、次々と従業員宿舎が建てられ、モータリゼーションの進展とともに、坂出市は以前にも増して、周辺地域からの流入圏としての意味合いが強められていったのである。

しかし、昭和48年の第1次オイルショックを契機とした経済の停滞は、坂出市にも大きな打撃を与えた。番の州に立地した企業は一転して不況業種となり、最近では工場で働く従業者数も激減している。それに伴い、市の総人口も昭和52年をピークに減少を続けている。

工業の振興には、企業誘致が大きな意味を持っていると思われる。しかし最近では、円高定着を背景に企業は海外立地を選択する傾向が強い。このような状況のもとで、地方への企業誘致は一層厳しくなってきているといえよう。これに対応していくためには、まず現在ある企業の技術水準を向上させ、積極的にメカトロニクス、新素材等の先端技術を取り入れていく必要がある。

また、橋の開通を目前に控え、広がるビジネスチャンスを求めて、ホテル、レジャー施設、スーパー等の建設が目白押しである。ここ数年で地域環境は一変してしまったといえる。

だが、大規模なプロジェクトだけに、その適応も難しく、解決を迫られる問題も多い。四国に入ってからアクセス道の未整備、大量の車からはきだされる排ガスの問題、離職船員、架橋で職を奪われる港湾労働者の就職問題等、数えあげればきりがないのである。人口7万人弱の小さな町が、本四連絡橋という国家的プロジェクトを前にして大きく揺れ動いている。

このように、坂出市では大規模な開発が、ここ20年にわたって次々と展開されてきた。ここで注目すべきことは、番の州開発にしても橋にしても、県や大企業、国など外部の力により開発されたということである。だが、坂出には坂出固有の自然条件、環境条件がある。そのことを忘れてはならないように思う。

地域開発は、その地域の活性化、さらには都市の発展に重要な役割を果たす。しかし、大切なのは、開発される側が、自発的、主体的な意思を持つことである。そうでなければ本当の意味で「地方の時代」はやってこないのではないだろうか。

また、大規模な開発を行ううえでは、常に先を見越して行うことが重要である。現代は工業化社会から情報化社会への過渡期であり、これからは知識や情報の価値がどんどん高まっていくと考えられる。このような時代に適応していくためには、橋や道路、空港といったインフラストラクチャーの整備も大切であるが、それ以上に、文化や教育といったソフト面での開発が重要性を増してくるであろう。

今から21世紀に至る10年余りは、坂出市にとって、歴史上最も重要な時期である。単なる橋の下の町にならぬよう、橋を新しいまちづくりの契機として位置づける必要があるのではないだろうか。そして、橋によって坂出市がどのように変わっていくか、長い目で見守り続けなければならない。